

§3.1 2項分布

2項定理を思い起こして下さい：自然数 n 及び数 a と b に対して、

$$\begin{aligned}(a+b)^n &= {}_n C_0 a^n + {}_n C_1 a^{n-1} b + {}_n C_2 a^{n-2} b^2 + {}_n C_3 a^{n-3} b^3 + \cdots + \\ &\quad {}_n C_{n-3} a^3 b^{n-3} + {}_n C_{n-2} a^2 b^{n-2} + {}_n C_{n-1} a b^{n-1} + {}_n C_n b^n \\ &= \sum_{k=0}^n ({}_n C_k a^{n-k} b^k).\end{aligned}$$

実数 p に対して、 $a = 1-p$ $b = p$ とします。

$$(1-p+p)^n = \sum_{k=0}^n \{{}_n C_k p^k (1-p)^{n-k}\}.$$

この等式の左辺は $(1-p+p)^n = 1^n = 1$ なので、

$$\sum_{k=0}^n \{{}_n C_k p^k (1-p)^{n-k}\} = 1.$$

このことより、次のような確率変数 X を考えることができます： X のとり得る値は 0 以上 n 以下の自然数 $k = 0, 1, 2, 3, \dots, n-2, n-1, n$ であり、

$P(X = k) = {}_n C_k p^k (1-p)^{n-k}$. このとき、

$$\sum_{k=0}^n P(X = k) = \sum_{k=0}^n \{{}_n C_k p^k (1-p)^{n-k}\} = 1.$$

従って変数 X は離散型確率変数です。

定義 定数 n は自然数で、定数 p は実数で $0 \leq p \leq 1$ とする。確率変数 X が2項分布 (binomial distribution) $B(n, p)$ に従うとは、 X がとり得る値が n 以下の自然数 $0, 1, 2, 3, \dots, n$ であり、 n 以下の各自然数 $k = 0, 1, 2, 3, \dots, n$ に対して

$$P(X = k) = {}_n C_k p^k (1-p)^{n-k}$$

となることである。

2項分布のことをベルヌイ分布ということもあります。

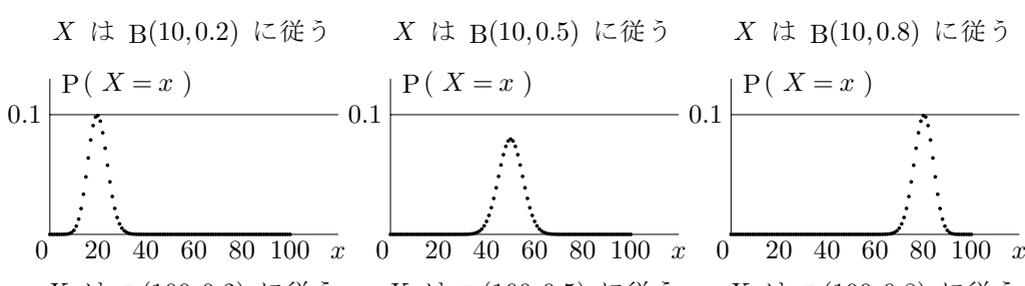
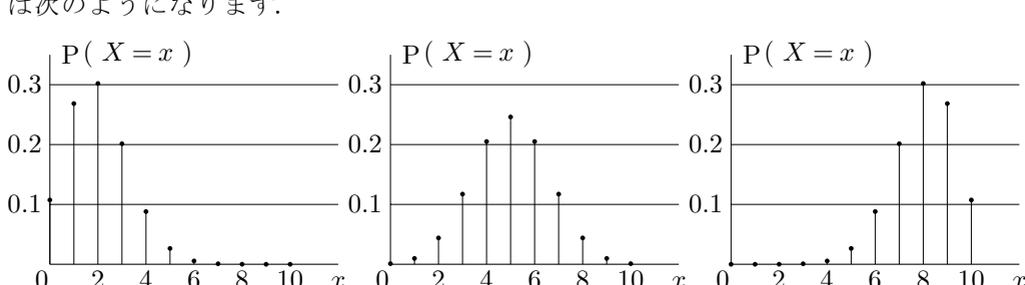
試行の反復について次の定理が成り立ちました。

試行 T において事象 A が起きる確率が p であるとする。自然数 n, k について $k \leq n$ とする。試行 T を独立に n 回行うという試行において、事象 A が起きる回数が丁度 k になる確率は ${}_n C_k p^k (1-p)^{n-k}$ である。

この定理より直ぐに次のことが分かります。

定理 定数 n は自然数で、定数 p は実数で $0 \leq p \leq 1$ とする。試行 T において事象 A が起きる確率が p であるとする。この試行 T を独立に n 回行うとき、 T の n 回の試行のうち事象 A が起きる回数を表す変数を X とおくと、 X は確率変数であり、2項分布 $B(n, p)$ に従う。

2項分布に従う確率変数 X について、実数 x に対する確率 $P(X = x)$ のグラフは次のようになります。



2項分布の平均値と分散とは次のようになります。その証明は後にします。

定理 3.1 定数 n は自然数で、定数 p は実数で $0 \leq p \leq 1$ とする。確率変数 X が2項分布 $B(n, p)$ に従うならば、 X は離散型確率変数であり、 X の平均値 $E[X]$ と分散 $V[X]$ とは、

$$E[X] = np, \quad V[X] = np(1-p).$$

例題 3.1 試行 T において事象 A が起きる確率が $\frac{1}{3}$ であるとする。この試行を独立に4回行うとき、この4回の試行のうち事象 A が起きる回数を表す変数を X とおく。この確率変数 X の平均値 $E[X]$ と分散 $V[X]$ とを求めよ。また、確率 $P\left(X \geq \frac{5}{2}\right)$ と $P(1 \leq X \leq \sqrt{11})$ とを求めよ。

確率変数 X は2項分布 $B\left(4, \frac{1}{3}\right)$ に従うので、

$$E[X] = 4 \cdot \frac{1}{3} = \frac{4}{3}, \quad V[X] = 4 \cdot \frac{1}{3} \cdot \frac{2}{3} = \frac{8}{9}.$$

X が取りうる値 $k = 0, 1, 2, 3, 4$ に対して $P(X = k) = {}_4 C_k \left(\frac{1}{3}\right)^k \left(\frac{2}{3}\right)^{4-k}$ なので、

$$\begin{aligned}P\left(X \geq \frac{5}{2}\right) &= P(X = 3) + P(X = 4) = {}_4 C_3 \left(\frac{1}{3}\right)^3 \left(\frac{2}{3}\right)^1 + {}_4 C_4 \left(\frac{1}{3}\right)^4 \left(\frac{2}{3}\right)^0 \\ &= 4 \cdot \frac{2}{3^4} + \frac{1}{3^4} = \frac{8+1}{3^4} \\ &= \frac{1}{9},\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}P(1 \leq X \leq \sqrt{11}) &= P(X = 1) + P(X = 2) + P(X = 3) \\ &= {}_4 C_1 \left(\frac{1}{3}\right)^1 \left(\frac{2}{3}\right)^3 + {}_4 C_2 \left(\frac{1}{3}\right)^2 \left(\frac{2}{3}\right)^2 + {}_4 C_3 \left(\frac{1}{3}\right)^3 \left(\frac{2}{3}\right)^1 \\ &= 4 \cdot \frac{2^3}{3^4} + 6 \cdot \frac{2^2}{3^4} + 4 \cdot \frac{2}{3^5} = \frac{32+24+8}{3^4} \\ &= \frac{64}{81}.\end{aligned}$$

終

問題 3.1 試行 T において事象 A が起きる確率が $\frac{2}{3}$ であるとします。この試行を独立に5回行うとき、この5回の試行のうち事象 A が起きる回数を表す変数を X とおきます。この確率変数 X の平均値 $E[X]$ と分散 $V[X]$ とを求めなさい。また、確率 $P\left(X \leq \frac{9}{4}\right)$ と $P(\sqrt{7} \leq X \leq 4)$ とを求めなさい。

————— 2項分布に関する定理の証明

定理 3.1 定数 n は自然数で、定数 p は実数で $0 \leq p \leq 1$ とする。確率変数 X が2項分布 $B(n, p)$ に従うとき、 $E[X] = np$, $V[X] = np(1-p)$.

証明 確率変数 X が2項分布 $B(n, p)$ に従うとする。 $q = 1-p$ とおく。

X が取り得る値は 0 以上 n 以下の自然数 $k = 0, 1, 2, 3, \dots, n$ であり、

$$P(X = k) = {}_n C_k p^k (1-p)^{n-k} = \frac{n!}{k!(n-k)!} p^k q^{n-k}.$$

$$\begin{aligned}E[X] &= \sum_{k=0}^n \{k P(X = k)\} = 0 + \sum_{k=1}^n \{k P(X = k)\} = \sum_{k=1}^n \{k P(X = k)\} \\ &= \sum_{k=1}^n \left\{ k \frac{n!}{k!(n-k)!} p^k q^{n-k} \right\} = \sum_{k=1}^n \left\{ \frac{n!}{(k-1)!(n-k)!} p^k q^{n-k} \right\} \\ &= \sum_{k=0}^{n-1} \left\{ \frac{n!}{k!\{n-(k+1)\}!} p^{k+1} q^{n-(k+1)} \right\} = \sum_{k=0}^{n-1} \left\{ \frac{(n-1)! n}{k!(n-1-k)!} p p^k q^{n-1-k} \right\} \\ &= np \sum_{k=0}^{n-1} \left\{ \frac{(n-1)!}{k!(n-1-k)!} p^k q^{n-1-k} \right\}.\end{aligned}$$

二項定理より、

$$\sum_{k=0}^{n-1} \left\{ \frac{(n-1)!}{k!(n-1-k)!} p^k q^{n-1-k} \right\} = (p+q)^{n-1} = 1^{n-1} = 1.$$

従って $E[X] = np$.

$$\begin{aligned}E[X(X-1)] &= \sum_{k=0}^n \{k(k-1) P(X = k)\} = 0 + 0 + \sum_{k=2}^n \{k(k-1) P(X = k)\} \\ &= \sum_{k=2}^n \{k(k-1) P(X = k)\} = \sum_{k=2}^n \left\{ k(k-1) \frac{n!}{k!(n-k)!} p^k q^{n-k} \right\} \\ &= \sum_{k=2}^n \left\{ \frac{n!}{(k-2)!(n-k)!} p^k q^{n-k} \right\} \\ &= \sum_{k=0}^{n-2} \left\{ \frac{n!}{k!\{n-(k+2)\}!} p^{k+2} q^{n-(k+2)} \right\} \\ &= \sum_{k=0}^{n-2} \left\{ \frac{(n-2)!(n-1)n}{k!(n-2-k)!} p^2 p^k q^{n-2-k} \right\} \\ &= n(n-1)p^2 \sum_{k=0}^{n-2} \left\{ \frac{(n-2)!}{k!\{n-2-k\}!} p^k q^{n-2-k} \right\}.\end{aligned}$$

二項定理より、

$$\sum_{k=0}^{n-2} \left\{ \frac{(n-2)!}{k!(n-2-k)!} p^k q^{n-2-k} \right\} = (p+q)^{n-2} = 1^{n-2} = 1.$$

$$E[X(X-1)] = n(n-1)p^2.$$

$E[X(X-1)] = E[X^2 - X] = E[X^2] - E[X] = E[X^2] - np$ なので $E[X^2] - np = n(n-1)p^2$, よって

$$E[X^2] = n^2 p^2 - np^2 + np.$$

定理 2.4.4 より

$$V[X] = E[X^2] - E[X]^2 = n^2 p^2 - np^2 + np - (np)^2 = -np^2 + np = np(1-p).$$

(証明終り)